

「児童研究部」における社会活動の報告

堀 尾 昇 平

Report on Social Activities of the “Child Research Department”

by

Shyohei Horio

要旨

本稿は、著者が「児童研究部」と関わるようになった1986年以降、2011年度までの社会活動の報告である。

最初に、社会活動先の紹介を行う。主な活動先として「中・四国保育学生研究大会」、学外ボランティア活動（チャリティーショー、知的障害児通園施設等）での発表活動、「創作発表会」における活動を記す。次に、活動内容についての報告を行う。児童研究部は、影絵表現・着ぐるみ等の表現活動を行ってきた。これらの活動は、現在保育学科で行っている「創作発表会」の活動内容に繋がっていることを指摘したい。最後に、現在の「児童研究部」についての問題点、即ち部員の減少に関して報告を行う。最盛期には30名いた部員が、現在は5名に減少している。そこで、在学生のボランティア活動に対する意識調査を行ったところ、学生がボランティア活動への意識が低い訳ではなく、「アルバイトなどで忙しい」といった意識の多様化がみられた。今後、このような学生の意識も勘案しながら「児童研究部」における社会活動を活発化したいと希望している。

キーワード：中・四国保育学生研究大会、ブラックシアター、影絵、着ぐるみ

1. はじめに — 本学「児童研究部」と本稿の目的について —

本学「児童研究部」の活動について述べる前に、まず、その沿革と部の概要について紹介する。

昭和 37 年（1962）、「下関女子短期大学」（当時名称、家政科のみ。2001 年「下関短期大学」と改称）が開学され、昭和 41 年（1966）に「保育科」が増設された（平成 13 年（2001）「保育学科」と改称）。筆者は、昭和 61 年（1986）に本学に奉職したため正確な創部年次は知らないが、「保育科が設置されて間もなく児童研究部が発足した」と聞いており、昭和 61 年当時から既に活発な活動を行っていた。本学の文科系部活動で、今日も活発に活動を行っている部活動は「華道部」「美術部」「園芸部」等があるが、「児童研究部」は創部以来 40 余年の歴史を持つ数少ない部活動といえよう。同時に、筆者は今年で四半世紀間、顧問として関わっていることになる。

活動目的は、地域貢献を行うこと、保育者として相応しい資質を育てること、この二つを重視している。後者の目的があるため、部員は保育学科学生が大半を占めている。

近年における主活動は、下関短期大学付属第一幼稚園・下関短期大学第二幼稚園における「誕生会」のお手伝い・下関市内各施設主催の催事ボランティア参加等である。

この 3～4 年、部員数の減少に悩んでいる一方で、下関市では平成 17 年（2005）に策定された下関市次世代育成支援行動計画「“For Kids” プラン 2005」や「“For Kids” プラン 2010」（平成 22～26 年度、後期計画）といった次世代育成のための動きもあり、地域及び地元保育施設からの社会活動参加要請は増加傾向にある。

そこで、本稿では、今までの主な社会活動報告（活動先紹介・発表内容報告）を行うと同時に、ボランティアに対する学生意識調査の結果報告を行うことによって、今後の活動活性化に繋げることを目的としたい。

2. 社会活動概要

先に触れたが、児童研究部の主たる社会活動先は、中国・四国保育士養成協議会による「中・四国保育学生研究大会」（以下「中・四国大会」と略記）・下関市内保育施設等におけるボランティア活動・大学主体チャリティーショー出場、以上 3 つに大別できる。そこで以下、この順番で概略を述べる。

2・1 「中・四国保育学生研究大会」参加について

中・四国大会に児童研究部が参加するため、筆者は、第 27 回大会（昭和 61 年、香川県にて開催）以降、顧問として発表内容指導・引率を行っている。参加状況については、本学紀要 29 号において既に 2009 年までの報告を行っているが¹⁾、本稿では 2011 年までの参加状況について、一覧表を掲載する（表 1 参照）。平成 20 年（2008）以降、部として発表していない理由としては、後述する部員の減少が挙げられる（本稿 4 参照）。

表1 下関短期大学 児童研究部「中・四国保育学生研究大会」参加一覧(1986~2011)

年度	回	当番県(当番校)、会場、期日	発表題名(内容)	参加学生等
1986 S61	27	香川県(香川保専) 香川県民ホール(高松市)	創作音楽劇「青い鳥」(ピンの栓を使ったガラガラなど手作り楽器を使用)	西崎美香 他 15名
1987 S62	28	岡山県(就実短大)、就実短大 講堂(岡山市)10/30~31	「ブラックシアター」(およげたいやきくん他)、交歓会(蛇腹式オバQ着ぐるみ使用)	宮崎珠恵 他 16名
1988 S63	29	島根県(県立島根女子短大) 島根県民会館(松江市) 10/20~21	ブラックシアター 「ディズニー夢のファンタジー」 (キャラクターが音楽にあわせて踊る)	村山真紀 他 16名
1989 平成 元年	30	高知県(高知女子短大) 高知県民文化ホール(高知市) 11/30~12/1	「影絵あそび・ファンタジー」 (3×4m組立式スクリーン制作・使用、 身体のみを使ったヒューマンシアター)	鎗分美也子 他 21名
1990 H2	31	鳥取県(鳥取女子短大) 倉吉福祉会館(倉吉市) 11/8~9	影絵「シルエットファンタジー つぼ」 (台本学生作成、2台のスライドプロジェ クター・OHP使用のヒューマンシアター)	浜本利恵 他 19名
1991 H3	32	愛媛県(聖カタリナ女子短大) 愛媛県民文化会館(松山市) 11/26~27	劇「タコにはなぜ骨がない」 (山口県民話をもとに学生台本による着ぐる みタコを中心にしたコミカル民話劇)	吉野好美 他 20名
1992 H4	33	広島県(安田女子短大) アステールプラザ(広島市) 12/1~2	影絵劇「てぶくろ」〔ロシア民話「てぶく ろ」をもとにOHP使用、影絵とスクリー ンから飛び出し演じる着ぐるみ(顔出し)劇]	江田千絵 他 19名
1993 H5	34	山口県(岩国短大) 岩国市民会館(岩国市) 12/3~4	ブラックシアター「そんごくう(金角・銀 角の巻)」(蛍光ボードを体に着けて一人で 動きの激しい一体を表現)	岡悦子 他 24名
1994 H6	35	岡山県(山陽学園短大) 岡山市民会館(岡山市) 11/30~12/1	影絵「交響曲<シンフォニー>」 (幼稚園児の入園から卒園までをイベント を通して影絵で表現)	柏原加奈子 他 27名
1995 H7	36	徳島県(四国大学短大部) 徳島市立文化センター(徳島市) 11/30~12/1	ブラックシアター「西遊記(火の出るうち わの巻)」(体に蛍光ボードを着けて出演。 布に蛍光色、揺らして炎を表現)	香西由里子 他 19名
1996 H8	37	香川県(香川短大)香川短大講 堂(宇多津市)11/30~12/1	「アクションソングの研究(3曲)(ダンス を入れた合唱、創作発表会で同内容を発表)	田村智子 他 21名
1997 H9	38	愛媛県(今治明德短大)今治市 公会堂(今治市)12/4~5	「ドラえもののポケット(ダンス3曲)」 (アブラハムの7人の子他、ダンス発表)	江崎香織 他 13名
1998 H10	39	広島県(比治山大短大部) 広島郵便貯金ホール(広島市) 12/2~3	着ぐるみ創作劇「ドリームワンダーランド」 (ウサギと仲間たちの幼稚園物語、悪い心 をブラックライトで表現)	吉田知子 他 17名
1999 H11	40	山口県(山口短大) 防府市公会堂(防府市) 12/1~2	着ぐるみ創作劇「The realities of life」 (キティ・パツ丸など人形達がクリスマス に人形(物)を大切にすることを表現する物語)	岩男佳寿美 他 24名 教員2名

堀尾昇平 「児童研究部」における社会活動の報告

年度	回	当番県(当番校)、会場、期日	発表題名(内容)	参加学生等
2000 H12	41	岡山県(倉敷市短大) 倉敷市民会館(倉敷市) 12/13~14	着ぐるみ創作劇「でたらめ?!ーキティちゃんパンダ大魔王の毒牙に一」(「悪い心の虫は誰にでもいるのか?」問いかける物語)	内田かすみ 他 16名
2001 H13	42	鳥取県(鳥取保専) 倉吉未来中心(倉吉市) 12/6~7	「ヒューマンシアター わたし?」 〔自然の音(波・砂浜・雨等)のみで身体表現影絵を行う〕	高橋悠史 他7名(3名補助参加)
2002 H14	43	島根県(県立短大) 島根県民会館(松江市) 12/4~5	プラスと着ぐるみによる劇表現「Voice・・・」 〔着ぐるみが喧嘩すると声が楽器(トランペット・サクソ・トローボーン等)になる〕	山本和佳 他 16名
2003 H15	44	高知県(高知学園短大) 高知県民文化ホール(高知市) 12/4~5	ダンス「Shall we dance?」 (「モーニング娘。」のダンス3曲発表。男子学生2名も参加)	長見真樹 他 17名
2004 H16	45	愛媛県(愛媛女子短大) 南予文化会館(宇和島市) 12/9~10	音楽表現「てぶくろを買いに」 (絵本「てぶくろを買いに」をもとにPC使用映像と楽器使用による読み聞かせ絵本表現)	駅場美波 他 12名
2005 H17	46	広島県(広島文化短大) 文化短大大学各講義室(広島市) 12/3	ヒューマンシアター影絵劇「みにくいあひるの子」(実技発表多数の為「口頭発表」に変更。ビデオ撮影による上映・実技演技を披露)	大田まゆみ 他 15名
2006 H18	47	徳島県(徳島文理大) 大学各講義室・ホール(徳島市) 12/9	「みんなといっしょー着ぐるみを使ってー」 (友達を仲良くさせるために、ぬいぐるみを仲介として仲良しになる物語)	田中沙織 他 14名 教員2名
2007 H19	48	岡山県(ノートルダム女子大) 大学各講義室・ホール(岡山市) 12/1	「ぬいぐるみ劇ーみんなといっしょー」 (ぬいぐるみが突然動き出し友達になる物語をぬいぐるみ劇として発表)	窪田真奈美 他 9名 教員3名
2008 H20	49	香川県(高松大学・短大) 大学各講義室・ホール・体育館 (高松市) 12/6	児童研究部不参加 〔木戸ゼミナール(発表Ⅱ・ゴスペル劇) 海野ゼミナール(発表Ⅰ・障害児支援)〕	学生20名 教員2名
2009 H21	50	山口県(下関短期大学) 海峡メッセ下関(下関市) 12/5	当番校(児童研究部の発表参加なし) 開会式・閉会式司会・5分科会進行・交歓会進行受付等、諸運営全体担当約1400名参加	学科全学生 ・教職員 計 90名
2010 H22	51	岡山県(美作大学短期大学) 大学各講義室・ホール・体育館 (津江市) 12/4	児童研究部不参加〔堀尾ゼミナール(発表Ⅰ・口頭発表)着ぐるみ劇「となりのトロ」(清い心の動物だけに見える物語のビデオ上映・説明)、木戸ゼミナール(発表Ⅱ)〕	学生12名 教員2名
2011 H23	52	愛媛県(松山東雲女子大学) 大学各講義室・ホール・体育館 (松山市) 12/3	児童研究部不参加〔2ゼミナール発表:海野ゼミ(発表Ⅰ障害児支援)・木戸ゼミ(発表Ⅱ音楽表現)、堀尾ゼミ(活動支援)〕	学生30名 教員3名

注)「参加学生数等」欄における教員数は、筆者単独引率参加の場合は記載せず、複数の場合のみ記した。



写真1 第37回中・四国保育学生研究大会
「アクションソングの研究」

著者にとって印象が強いのは、最初に引率した第27回大会参加である。それは、本学の発表を客観視する場として絶好の場であることが実感できたことと、他大学発表が今後の努力目標となることが分かったためである。第27回に児童研究部が発表した作品は、創作劇「青い鳥」であった。手作り楽器の制作・小道具（青い鳥・折りたたみの鳥かご）など学生と話し合いながら制作し、舞台を構成し、それなりに工夫したつもりで発表に挑んだ。しかし、中・四国大会における発表では、他大学との差は歴然としており、より高次の工夫・努力によって発表が行われていた。

同時に、第27回中・四国大会でブラックシアター発表を見学したことが、第28回大会におけるブラックシアター発表に繋がった（本稿3・1参照）。

以降、児童研究部の中・四国大会参加によって、他大学の発表内容・技術を観察し、実際に自分たちが実践・発表することが一つの発表技術取得・向上の方法となった。換言すれば、児童研究部の中・四国大会参加によって、後述する影絵表現の誕生（本稿3・2参照）、着ぐるみ表現技術の向上を図ることができたといえる（本稿3・3参照）。

児童研究部が中・四国大会において発表した作品は、学生達が独自に工夫を凝らした作品も多い。過去の発表で特に注目したいのは、以下の3作品である。第34回発表の山口民話劇「タコにはなぜ骨がない」では、民話をコミカルな劇にして表現する試みを行った。第37回発表「アクションソングの研究」では、合唱に合わせてダンスを発表した（写真1参照）。第43回発表「Voice・・・」ではブラスバンドと着ぐるみによる創作劇を実践した。これらは、内容だけでなく、発表方法においても既存の形態に甘んじるのではなく、学生自身で発表方法を再考し「民話+コメディ」「合唱+ダンス」等、複合的な発表にすることによって生み出した新たな作品と考えられよう。これら児童研究部の中・四国大会参加・発表は、今後の実践発表活動の参考になると考えている。

2・2 下関市内保育施設等におけるボランティア活動

先に述べたように、児童研究部は地域貢献を目的として、下関市内の保育施設や社会福祉施設におけるボランティア活動を重視している。そこで、部員を中心に「着ぐるみショー」等の発表ボランティアを行ってきた。

単発的に行った主な行事参加には以下がある。1) 下関市内保育所・幼稚園行事参加等（千



写真2 千草保育園における発表（1994年）



写真3 「員光園まつり」におけるボランティア（1996年10月）

草保育園：1994年（写真2参照）、吉見保育園：2007・2008年、安岡幼稚園：2011年）、2）下関市立児童館（ひかり童夢：2009年、ひこまる：2010年・2011年）、3）下関ツインズファミリー（多胎児を持つ家庭支援、クリスマス会、1997年・1998年）、4）楠町依頼公演（楠町町民会館、1989年）、5）火の山観月会（1994年）、6）プレきらら博キッズカーニバル（2000年）、7）山口県主催キッズカーニバル（2003年）、8）中間市消防クラブ（市内幼稚園・保育園発表、2003年）、以上8つである。

また、5年以上、継続して参加している社会活動に以下がある〔施設名（施設概要・行事等、参加期間）〕。

- 1）下関市社会福祉センター内「マザーズホーム」（知的障害児通園施設・「下関市子ども発達センター」の前身、クリスマス会、1988～1994年）
 - ・下関市こども発達センター（七夕会・着ぐるみショー、1995年開園～至現在）
- 2）なかべ学院（児童養護施設、「さつき祭」、開始年未詳～至現在）
- 3）社会福祉法人 員光園（知的障害者援護施設「員光園まつり」、1994年～2007年）
- 4）馬関まつり「子ども広場」（2001年～2008年）

冒頭に述べたように、上記の他にも、市内保育施設における単発的な行事参加ボランティアの要請は、増加傾向にある。これらの要請に応えるためにも学生のボランティアに対する意識向上が必要と思われる（本稿4参照）。

2・3 下関短期大学学友会主催「チャリティーショー」

児童研究部の社会活動として昭和56年（1981）から平成5年（1993）までの13年間（毎年12月）、合計13回開催された「チャリティーショー」の出演がある。「チャリティーショー」は、本学「学友会」の主催であり、地域社会貢献を行うことを目的として、場所は下関市中央公民館・シーモール下関等を利用して行われた（写真4参照）。

活動内容は、1）日頃の学内活動（学友会・保育学科・音楽科・社会福祉部・児童研究部等）



写真4 第11回チャリティーショー(1991年12月1日)

表2 下関女子短期大学学友会主催「チャリティーショー」児童研究部発表一覧(1987~1994)

回	年月日	内 容	備考(場所等)
6	1987年(S.62) 11月22日(日)	着ぐるみ劇「三匹の子ぶた」 ブラックシアター「およげたいやきくん」他	シーモール下関4階 シーモールホール
7	1988年(S.63) 12月18日(日)	ブラックシアター 「ディズニー夢のファンタジー」	シーモール下関1階 スクエア
8	1989年(H.1) 12月10日(日)	手話による歌「切手のない贈り物」他 パネルシアター	シーモール下関2階 泉の広場
9	1990年(H.2) 12月2日(日)	シルエットファンタジー「つぼ」 クリスマスソング	シーモール下関4階 シーモールホール
10	1991年(H.3) 12月1日(日)	劇「なぜタコに骨がない」 着ぐるみと遊ぼう	シーモール下関2階 泉の広場
11	1992年(H.4) 11月29日(日)	影絵劇「てぶくろ」 着ぐるみショー	シーモール下関4階 シーモールホール
12	1993年(H.5) 12月23日(木)	着ぐるみショー お姉さんと遊ぼう	シーモール下関2階 泉の広場
13	1994年(H.6) 12月18日(日)	着ぐるみショー	シーモール下関2階 泉の広場

を発表する、2)「歳末助け合い募金」行い、報道機関を通じて募金を寄付する、という2つのボランティアを主体としている。

筆者が児童研究部顧問となったのは先述の通り昭和61年度以降のため、当初5回分の発表内容は定かではないが、中・四国大会と日程が近いこともあり、第6回~11回では同内容を発表していた(表2参照)。

しかしながら、発表は回を重ねるごとに各発表団体の連携不徹底・練習不足を指摘されるようになったため、11回以降、継続の検討が必要となった。第13回は、発表参加団体が児童研究部だけとなったこともあり、この回を最後に「チャリティーショー」を中止するに至った。



写真5 第7回「チャリティーショー」パンフレット
(左)表紙・(右)見開き(1987年11月22日開催)

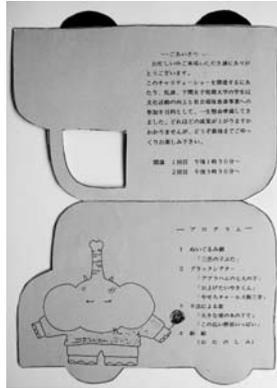


写真6 第1回「創作発表会」
パンフレット(表紙原案)
(1989年2月4日開催)

児童研究部における本活動の成果は、地域子ども達への発表を通じて技術の研鑽ができたことが挙げられる。即ち、中・四国大会は、学生相互の研究・技術研鑽の場であったが、このショーはボランティアであると同時に子ども達と直接触れ合える発表の場であった。従って、子ども達の反応を確認しながら発表する経験を積み重ねることができたことは重要であった。特に、このショーで発表した「着ぐるみショー」は、現在の活動の基礎となった。その一方で、チャリティーショーでの発表内容は、VTR 記録を作成しているだけで、台本等、他の記録が殆ど残っていないことは残念なことといえる。

また、このチャリティーショーの意義をより巨視的にみると、保育学科主催「創作発表会」(昭和 63 (1988) 年度第 1 回～平成 23 (2011) 年度第 24 回) や、平成 20 (2008) 年度から本格的に導入された保育学科ゼミナール活動へと受け継がれていったと考えられる。

一例を挙げると、このショーで作成されたパンフレットは、学生がデザインを考えて制作するのが恒例であった。当初は、家庭用小型印刷器具を使用して一枚ずつ手作りで制作したものを当日に配布した(写真5参照)。平成 23 年現在、保育学科主催「創作発表会」のパンフレットは、パソコンやカラーコピー機を使用するが、第 1 回から一貫してそのデザインは毎年学生が考えた作品から制作している(写真6参照)。

また、ショーの会場として使用していたシーモールホールは、下関市文化会館が平成 18 年(2006) 度、改装閉館を行ったことを皮切りに来場者の利便性も考え、平成 18 年度以降、創作発表会の会場として使用している。

3 表現内容

児童研究部の活動内容は、着ぐるみショー・着ぐるみ劇・ブラックシアター・影絵・創作劇・

ダンス等、多岐にわたる実技発表形態を行ってきた（表1参照）。

本稿では主な表現内容として、以下、筆者の顧問担当期間に導入した順番にブラックシアター、影絵表現、着ぐるみの3つを紹介する。

3・1 ブラックシアター

ブラックシアターを本学児童研究部が導入したきっかけは、先に述べたように（本稿2・1参照）、第27回中・四国大会（昭和61年度）の参加によって他大学が発表した「ブラックシアター」を見学したことにある。その衝撃は、発表直後、会場において本学学生達と共に発表校に対して制作方法等について質問を行い、復路の車内で次年度の発表をブラックシアターに



写真7 第36回中・四国大会発表
「西遊記(火の出るうちの巻)」

決定したことからも窺えよう。なお、ブラックシアターとは、ブラックライトシアターとも呼ばれる発表形態で、暗室・暗いステージ上で行う。蛍光塗料（蛍光ポスターカラー）を塗った衣装またはパネルをブラックライトの蛍光灯（UVライト）で照らすことによって、人間やパネルの動きが真っ暗な中に浮かび上がるという表現形態である。

第28回中・四国大会では、本学初の試みということもあり、機材の調達・パネル制作・発表方法共に試行錯誤を繰り返し、授業終了後毎晩遅くまで練習した記憶がある。その後、3回の中・四国大会（第29回・第34回・第36回）では、表現内容や布を使う等、表現方法を変えて発表を行った（写真7参照）。

第37回すなわち平成8年度以降、児童研究部はブラックシアターによる発表は行っていないが、「創作発表会」でこの表現方法による発表は継続的に行われ、平成20年度以降のゼミナール活動においても活動の一環として導入されている。

3・2 影絵表現

児童研究部が導入した影絵表現は、人形型等を操る影絵ではなく、人間自体が表現を行うヒューマンシアターを積極的に行ってきた。中・四国大会では、第30回・第31回・第33回・第35回・41回・第46回、以上合計6回、断続的に発表を行った。大会では、様々な表現方法（ライト2灯を使用する方法他）を考案・実践。スクリーンも発表用として特別に組立式の4×3メートル大の物を手作りした。これは、中・四国大会における発表機材をいかに効率よく移動できるか、即ち組立式にしてコンパクトにすることによって簡便に運搬可能な物にするために考えられた組立式スクリーンであった。結果的には、この「組立式」という形態が、その後の

中・四国大会にも対応できるものとなり、「ボランティア先の幼稚園・保育園の室内まで移動・発表できる形態」に適応することとなった。また、影絵表現は、現在視聴覚教育授業にも導入している。

3・3 着ぐるみ

「着ぐるみ」は、現在「児童研究部の代名詞」といっても過言ではなかろう。児童研究部活動や「創作発表会」その他ボランティア活動において欠かせない発表表現となっている。中・四国大会では、第39回～第41回、第43回・第47回・第48回と過去6回、発表を行ってきた。その発表内容の大半は部員の創作である。

このように中・四国大会での発表は、第39回（平成10年）が最初であるが、「着ぐるみ劇」もブラックシアター・影絵表現と同様、中・四国大会に参加したことがきっかけとなった。第29回（昭和63年度）中・四国大会で他学が発表した〈セサミストリートのビックバード制作過程と実技発表〉を見学し、触発されたのが本学における導入のきっかけとなったのである。

第29回中・四国大会から帰校後、すぐに学生の発案により著者と学生達は、同じ「ビックバード」制作に着手した。まず、発表を撮影したVTRから型紙を起こし制作を開始。全てダンボールで作られていたので、同様に制作し1ヵ月余りで完成した。着ぐるみの本体は段ボール10cm×10cmの集合体で、その上にビニール紐で羽を作り、本体の段ボールに縫い付ける手法であるため、重量は20kg近くなった。中に入って演じる為には、体力に自信がある学生でないと動けなかった。だが、当時の学生達は自分達で調査研究を行い、制作に対する労力・時間を惜しまず努力し、発表にも貪欲に挑戦した。

他方、この「ビックバード」が平成元年（1989）度の保育学科主催「創作発表会」における初の着ぐるみ発表として演じられた。著者にとっては、ビックバードに入っている学生は、次の出番までその中で待機するほど体力を消耗していたことが思い出される。

なお、現在30数体を保有している「着ぐるみ」の本体は、全て「造形表現」を担当する著者による手作り制作である。昭和63年（1988）に制作した最初の作品は、外部（市内アマチュア市民劇団「海峡座」座長）からの依頼で制作した物である（写真8参照）。紙をコーティングした張り子の頭部で、かぶってセリフが言えるように口を大きく制作した。その後、著者は、座長から大道具を作る依頼を受けた際、座長の友人（広告代理店社長）から「発泡スチロールでの制作」を提案された。この案をヒントにして、着ぐるみの頭部制作に利用することが、現



写真8 「着ぐるみ」頭部
試作品

在の着ぐるみ頭部作成技術に繋がっている。

これ以降、筆者は、先述の発泡スチロールを使い、ガチャピン・ムック、じゃじゃ丸・ぴっころ・ぼろり、ミッキーマウス・ミニーマウス、アンパンマン等を制作。児童研究部の発表で使用されている（写真2・3・4参照）。

4 おわりに ー 学生アンケートによる意識調査と今後の活動について ー

冒頭に述べたように、昨今、地域からボランティア発表の要望が多くなっている一方、児童研究部部員の減少が問題となっている。筆者が顧問を務めているこの25年間で、最も部員が多かったのは平成6年（1994）頃で30余名が所属していた。これは保育学科の定員が100名という時期で、学生数が多かったこともあるが、平成23（2011）年度現在は5名にまで減少している。特に、この3～4年は一桁の部員数が続いていることもあり、中・四国大会に児童研究部として発表参加できない状態が続いている。

そこで、今後の児童研究部活動を考える資料として、平成23年保育学科1年・2年にボランティアに対する意識調査（アンケート）を実施した（1年生34名、2年生23名、合計57名回答）。以下、アンケート内容及び結果を報告する。

1) 「ボランティアをしたことがありますか」

- ・学校ボランティア（中学・高校・大学主催）清掃・募金等 50名（87%）
- ・地域主催・外部施設ボランティア（町内会・民間団体主催等） 21名（37%）

2) 参加動機・内容について

- ・自主的参加 16名（28%）
- ・ボランティア内容：施設訪問・祭り等手伝い・国体など

3) ボランティアをしたことがない

- ・7名（13%）
- ・ボランティアをしない理由：「アルバイトなどで忙しい」が大半

4) 「児童研究部活動に興味がありますか」

- ・「はい」14名（24%）
上記14名の内「部員になってもいい」5名（2年1名・1年4名内2名が新入部員希望）、
「手伝いならいい」9名（2年6名・1年3名）、「興味があるが参加できない」7名
- ・「いいえ」33名（61%）

アンケートの結果をみると、厚生労働省指導による授業欠席数及び公欠扱い指導の変化により授業時間内の部活動（付属幼稚園誕生会発表等）が出来なくなっていることが、学生がボランティアに参加しない理由に挙げられよう。実際、夏期休業中のボランティアには、積極的に

参加する者がいる。

また、児童研究部の活動に対して、約四分の1の学生が興味・関心を持っていることが今回の調査で分かった。これらの学生を基に、平成24年度（2012）は、再び中・四国大会に児童研究部として発表参加を行うことを一つの目標として指導を継続したい。

同時に、今回の調査結果より、今後、授業・クラスアワー等を通じて、学生へのボランティアに対する意識向上を図る必要があることが分かった。著者は、教室内の授業では味わえない体験、即ち地域社会の人たちや子ども達と積極的に触れ合い、ボランティア活動を行うことによって、真の社会人として成長できるものと考えている。従って今後、児童研究部活動を含めた地域ボランティア活動の活性化を目標としたい。

注

- 1) 堀尾昇平：「第50回 中・四国保育学生研究大会」当番校活動報告，下関短期大学紀要，29号，2011年